丸髷

〔歷世女裝考四〕丸髷

髮に結ふふりの名ありしより、およそ百年ののち、伽羅の油といふ物いできてのちは、髮のゆひぶりにさま〳〵の形も名もありしかど、今世に行れるは、かたはずし、まるまげ、ゑまだの三樣なり、されどかたはづしは下輩に用なし、島田は齒を染て用なし、他國の田舍には、老女の島田なるもありとぞ、上下老若に亘りて、いと重寶なるは丸髷なり、此まるまげを、かつ山のくづしとするはひが事なり、きのふはむかし寫本、江戸作、序に元文二年、卷二に、今のまるわげはかん玄よりゆひはじむとあり、かんゑよとかなにてあれば、さとし、がたし、續連珠、延寶四年板、俳書、丸わげか渦まく影の柳髮、琴ト藤かづらしてや丸曲柳髮可道などあり、然れば丸曲も百八十餘年前よりありへし風なり、されど古圖にはすくなし、丸髷、西土はいと古し唐書五行志に、元和末、婦人爲圓鬟推髻、不設髻飾、こゝに圓鬟とは、まるまげときこゆ、又酉陽雜俎續集三卷坊正人名ナリ叩門五六有丸髷、婉童啓迎云々、丸髷とあるは、乃丸髷なり、西土畫にもまたみえたり、

勝山

〔歷世女裝考四〕勝山といふ髮の結風

勝山といふ髮の髻今も其名は殘りつれど、髷の狀は當世なり、古き形狀は圖をみて玄るべし、此髻は二百年前承應の間、江都に名高かりし湯女勝山が結はじめたる髷也、此勝山湯女風呂國禁ありてのち北廓に入り、かの高尾と時を同うして、その名ます〳〵聞ゆ、万治三年江戸板、高屏風管物語上卷に、北廓の茶屋の老婆、遊客に妓どもを指て名ををしゆる所、さて巴の御もんをめしたる、御としのほどはたちばかりの御方は、たせんのせうさんとて、丹前京田舍に名高き勝山さまとこそ申なれ、中略みどりなる髮をば手がはりにゆひなし玉ふとあり、此かつ山が結風、はやりつたへしとみえて、万治三年より廿五年のち、天和三年江戸板、浮世物眞似口寫、横本上卷花の露屋喜左衞門が芝宇田川町トあり店にて、伽羅の油いひ立の詞に、まつた女中のだて風は、兵庫、つのぐる、いは玄まだ、かつ山りうとあり、又勝山が廓に在し万治二年より廿四年のち、天和二年大坂西鶴作、一代男一卷に、